

【報告】特設分科会 2 「効果的な校内研究推進マネジメント」

◆シンポジスト	盛岡市立仁王小学校	校長	横沢 幹雄
	宮古市立第一中学校	校長	伊藤 晃二
◆コーディネーター	県立紫波総合高等学校	校長	坂本 晋
◆基調提案	教育センター 主任研修指導主事		齊藤 義宏
	教育センター 主任研修指導主事		鈴木 敏彦

1 特設分科会 2 の構成

特設分科会 2 は、授業改善や授業力向上が図られる効果的な校内研究の進め方について探るべく、「基調提案」「シンポジウム」「参会者による協議・情報交流」で構成した。以下にその概要を報告する。

2 基調提案について

【基調提案の要旨】

- ① 校内研究の目的は、「教師一人一人の授業力の向上」である。
- ② そのためには、「個々の取組の重視」「研究協議の柱の焦点化・具体化」がポイントとなる。
- ③ 具体的な方策として、教師一人一人の「アクション・リサーチへの取組」と、互いの実践に学び合い財産を共有化していく「シェアリングの機会の設定」が有効である。
- ④ 研究主任や管理職の役割は、上記①～③が効果的に推進されるよう研究・研修体制をマネジメントすることである。

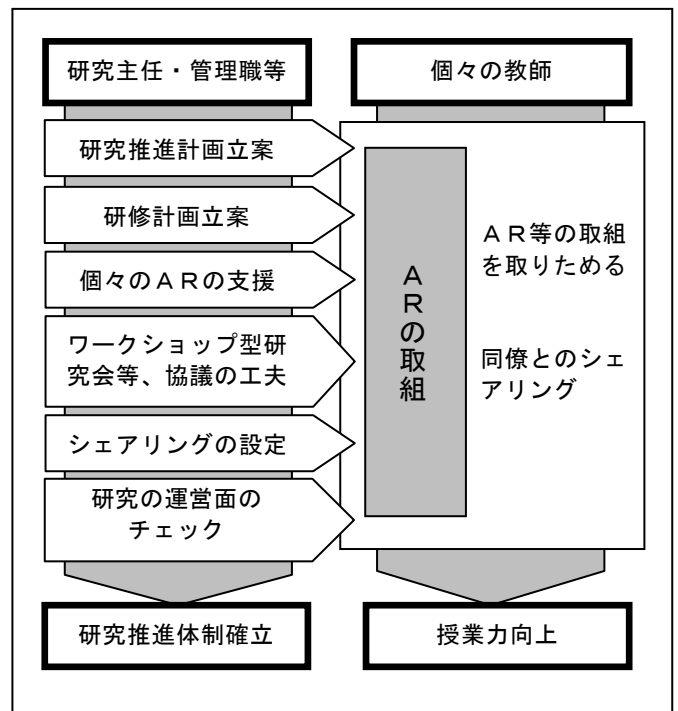
上記①～④のことを図示したものが右の【図 1】である。

授業力向上を図るための方策としては、アクション・リサーチ（以下ARと記述）の導入が効果的である。一般的にARは、〔実態把握・課題設定〕→〔仮説の設定〕→〔手立ての立案〕→〔実践計画の立案〕→〔実践〕→〔分析・考察〕→〔まとめ〕という道筋をたどるが、今回

提案したARでは、以下のポイントに配慮することで、「多忙化」を抱える学校の実態に沿うとともに、達成感を伴った即効性のある取組になると考える。

【岩教セ版AR実施上のポイント】

- ① 〔課題設定〕は、担任する学級や自己の実態等に応じて設定する。
- ② 〔仮説〕及び〔手立て〕の立案に当たっては、先行研究・先行実践、参考文献等を大いに参考にする。
- ③ 〔考察〕及び〔まとめ〕において、自己の授業力について省察し、レポート等にまとめ蓄積する。



【図 1】校内研究推進モデル

研究協議（研究会）では、ワークショップ型研究会（以下WS型研究会と記述）の導入が効果的である。県内においても、WS型研究会が

広く取り入れられており、参加者の主体的参加や、協議の活性化等の成果を生んでいる。今後は、そこで用いるワークシートの様式等の工夫や、指導案上に協議の視点を記載したり、研究授業前に授業者が参観の視点を説明したりして、協議の焦点化をより一層図ることが望まれる。

3 シンポジウムについて

(1) 盛岡市立仁王小学校の取組

ア 「授業力」向上の3つの視点

①子ども理解

「子ども理解の深浅が、指導の深浅を生む」という共通認識の下、共感的理解を大切にしている。

②指導の自己改善

一人一人の子どもの「できるようになりたい」「わかるようになりたい」「認められたい」という願いの実現に向けて、自らの指導を振り返り、高め合うことを大切にしている。

③教師の基礎基本

専門職としての意識の構築、学びを支える行動様式の確認を行っている。

イ 「授業力」向上への5つの場と取組

①学団研究会

担任全員が授業を公開し、教師の基礎基本について確認するとともに、子どもの実態把握を行う。

②学年会

授業参観等を通しながら、主として子ども理解の場、指導改善の場となる。

③実習生指導

教科等の基本事項の確認や、最新動向の情報共有を図り、自らの教科専門性の拡充を図る。

④研究部研修

14の教科等研究部において、先輩の指導を受けるなどして教科等の専門性の向上を図る。

⑤全校研究会

中心は授業改善。上記①～④での学びが生

かされる多面的な学びの場である。

ウ 全校研究会の課題と改善策

〔問題点①〕 分かりにくい研究内容

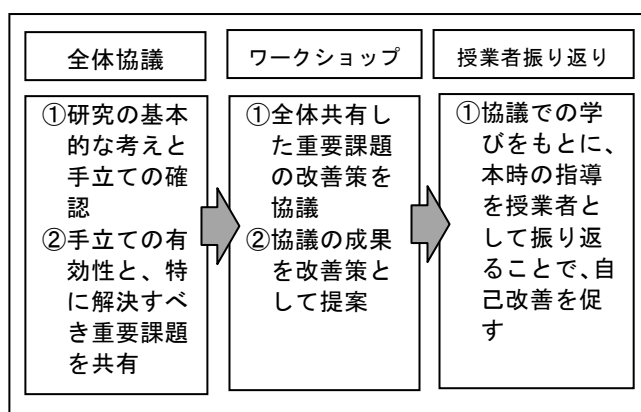
→分かりやすい研究へのスキルアップ

- ・授業レベルでの研究の具体化
- ・見て読んで分かる紀要づくり

〔問題点②〕 成果の見えにくい研究協議

→焦点化された協議、教員個々の力を生かし、成果を積み上げる協議

・仁王型ワークショップの開発



【図2】 仁王型ワークショップの流れ

〔ワークショップの留意点〕

- ・授業に生きるワークショップにするために学びの事実から離れない。(子どもの発言や、表情、ノートと、教師の働きかけを照らし合わせる。)
- ・授業者の意図を踏まえた提案をする。(授業者の省察を促し、授業改善へつなげる。)

エ 「授業力」向上の要

上記の仕組が、教師一人一人の授業力向上として結実するかは、授業力向上を目指す願い・意思の強さにかかっている。それは、実践ノートとして具現化される。

自らの実践を省察し、自己改善し続けることが重要である。

(2) 宮古市立第一中学校の取組

ア マネジメントの観点を意識した経営理念

年度当初、次のことについて全教職員で共通確認し、教育活動にあたっており、校内研究も

これらに則り行っている。

《共通目標》

「明るく、楽しく、風通しのよい仕事ができる」
ー変化に対応する柔軟性が基本ー

《仕事の原則》

「シンプル・スピード・センスを生かす」

《仕事の基本》

- ①報告・連絡・相談の徹底
- ②指導方針の共通理解
- ③情報の共有化

《学校の役割》

- ①生活基礎力の保証
- ②学習基礎力の保証
- ③進路達成力の保証

《チーム宮古一中の心得》

- ①コンプライアンス＝基本姿勢は教育公務員としての使命感と責任感
- ②信頼関係＝教職員・生徒・保護者の相互理解を基本に信頼される学校
- ③サービス管理＝健康管理・情報管理・金銭管理・時間管理・文書管理

- ④信条＝勤勉・誠実・謙虚

イ 学校公開の理念

11月11日に行った学校公開研究会は、以下の理念の下、既存のもち方を見直し実施した。

- ①発想を変える＝仮説検証型から日常実践提示型へ（校内研究の在り方の見直し）
- ②コンパクトな運営＝諸準備、リーフレット、自己課題解決シート、指導案等の工夫改善（シンプル・スピード・センス）
- ③生徒会活動の推進＝全校合唱と生徒会長挨拶（生徒を全面に据える）
- ④WS型研究会の推進＝日常実践の継続と研修の自己啓発
- ⑤同僚性の認識＝チーム宮古一中の参画意識と自尊意識

ウ 宮古一中校内研究の工夫

- ①中学校の現状に合った校内研究を創る
・教師一人一人がモチベーションを上げて校

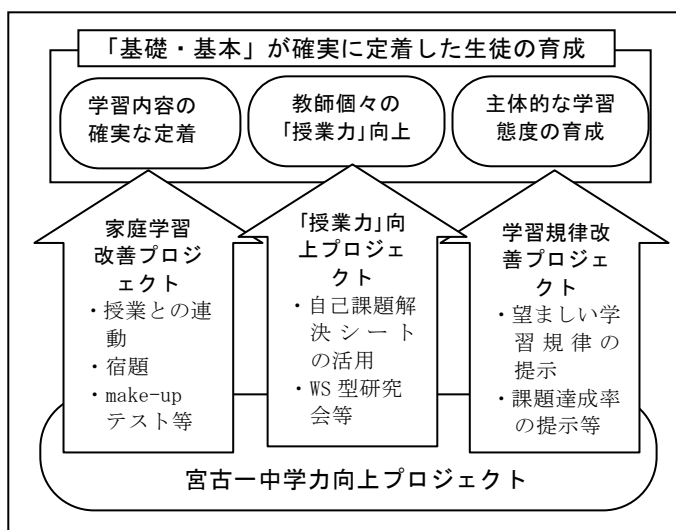
内研究に取り組むためには、一人一人の課題に沿った研究推進が必須である。（研究主任から与えられるような校内研究、一部の教師のみで進める校内研究ではいけない。）

- ・「授業改善」とともに、多くの中学校が取り組んでいる「家庭学習の充実」「学習規律の確立」についても同時に取り組み、校内研究の充実及び基礎基本の定着を目指す。

②全校での取組と教師個々の取組をつなぐ

- ・指導案上に、個人課題を記載し、研究協議ではそれを協議の柱とする。
- ・シェアリングを行い、成果と課題を全員のものとする。
- ・研究授業とWS型研究会のサイクルで、全教師の授業力向上を目指す。

こうして生まれたのが本校の「授業力向上プロジェクト」「家庭学習改善プロジェクト」「学習規律改善プロジェクト」の3本柱による《宮古一中学力向上プロジェクト》である。



【図3】宮古一中学力向上プロジェクト

(3) 紫波総合高等学校の取組

ア 学力向上のための取組について

- ①授業2分前の予鈴の設定
- ②校内授業公開週間の実施（年2回）
- ③生徒による授業評価の実施（年2回）
- ④学校訪問の実施
- ⑤授業ガイダンス週間の実施

⑥教育センターとの連携

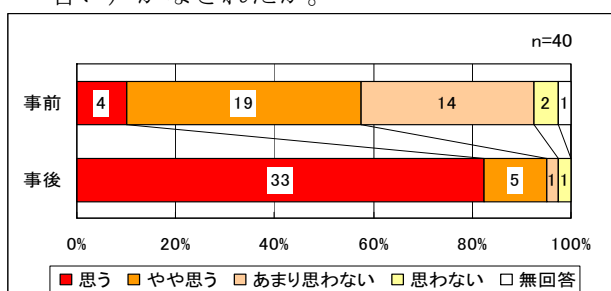
⑦全体研究授業とWS型研究会の実施

イ WS型研究会の実施について

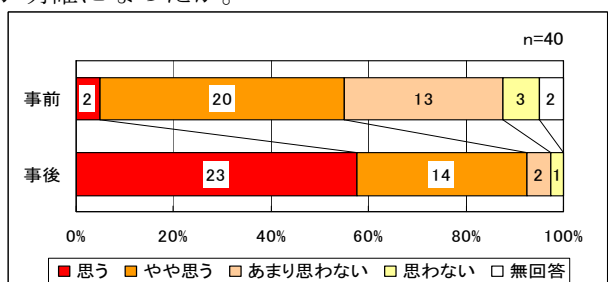
中堅からベテラン教員の授業改善が手薄になっているのではないかという課題があり、教科の枠を越えた全員参加のWS型研究会に取り組んだ。

ウ WS型研究に対するアンケート調査結果
「従来型の研究会(事前)」と「WS型研究会(事後)」の比較 (抜粋)

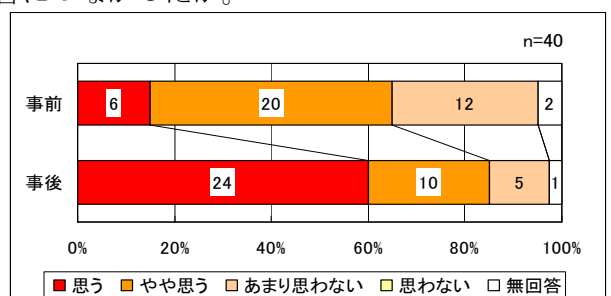
Q 1. 校内授業研究会で活発な質疑応答(話し合い)がなされたか。



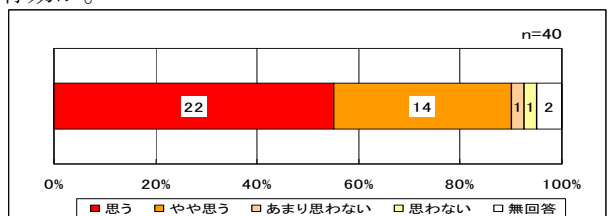
Q 2. 校内授業研究会で成果と課題及び改善策が明確になったか。



Q 3. 校内授業研究会の結果があなたの授業改善につながったか。



Q 4. WS型研究会は従来型の授業研究会より有効か。



エ WS型研究会のまとめ

<成果>

- ・「授業そのもの」の振り返りが図られる。
- ・同僚性が発揮される。
- ・校内資源の活用が促される。
- ・思い込みや常識の見直しが図られる。

<今後の展望と課題>

- ・優れた指導力が「個から個へ」の伝授ではなく、学校全体のものとなるようにする。
- ・教員が1年間の目標を立てて、年度当初に生徒に示し、達成状況を生徒授業評価で検証する。
- ・本校生徒の実態に即した「授業のユニバーサルデザイン化」を考える契機とする。

WS型研究会は、高校でも授業力向上の有効な方法になると感じている。

4 参会者による協議・情報交流(WS型協議)

シンポジウムでの学びや、各校の校内研究に関する成果・課題等について、200名を越える参加者で協議・情報交流を行った。

【参会者全員によるWS型協議の様子】



4 まとめ

3校に共通する工夫された取組として、以下のことがあげられる。これらは、効果的な校内研究推進マネジメントを推進していく上での重要な視点である。

- ①教師個々への課題意識の持たせ方の工夫
- ②自己啓発におけるモチベーションの高揚・維持の工夫
- ③チームワーク・同僚性構築のための戦略の工夫

※シンポジストの資料については、Web上に補助資料として掲載しているので参照のこと